

### 3. 増養殖技術研究費

#### 1) ウツセミカジカの養殖Ⅱ

—配合飼料による養成および沖曳網による漁獲状況—

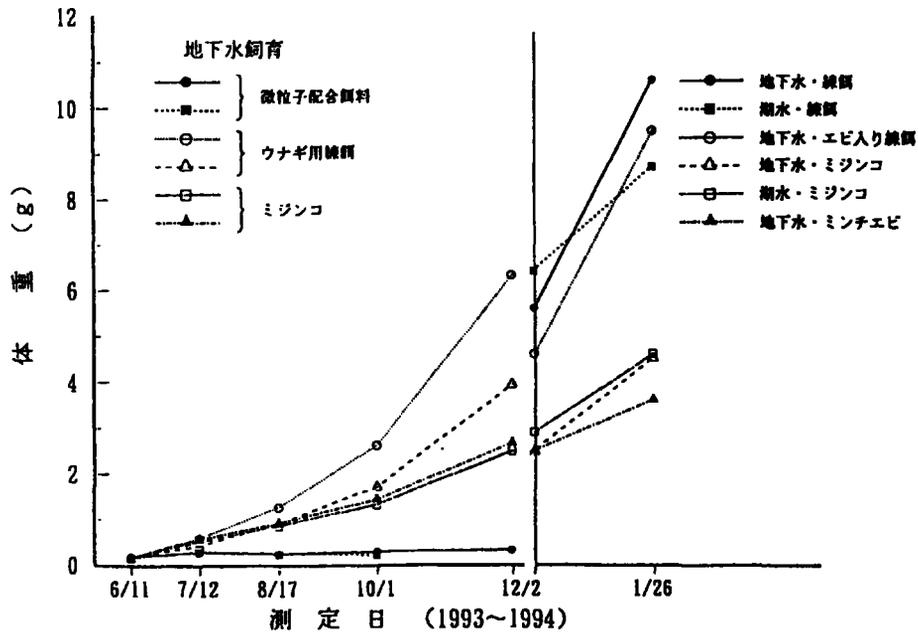
水谷英志・太田滋規・岩崎治臣

【背景・ねらい】最近、他府県ではカマキリやカジカが漁業振興上の新魚種として注目されている。ウツセミカジカはカマキリやカジカに近縁な琵琶湖の固有種であるが、漁獲されても雑魚扱いで有効に利用されていない。そのため、昨年は本種を活餌で飼育したところ、2年目までの成長はカマキリと大差ないことが明らかとなった。そこで、今年は配合飼料による飼育を検討するとともに、本種の沖曳網で漁獲される状況について調査した。

【成果の内容・特徴】①、93年6月にエリで漁獲されたウツセミカジカ0+魚（全長23~31mm、体重0.16g）を20%のコンテナ水槽6個に各々20尾収容し、地下水を注水して飼育した。飼料は微粒子配合飼料B1、ウナギ用練餌、ミジンコの3種とし、給餌後の1時間程は止水にした。微粒子配合飼料B1はほとんど摂餌せず、生残率は1ヵ月で50%、2ヵ月で17%と著しく低下した。ウナギ用練餌をうどん状にして給餌した区は、生残率は80%以上で推移し、1ヵ月で0.4~0.6g/尾、2ヵ月で1.0~1.3g/尾、6ヵ月で4.0~6.0g/尾に成長した。この値は昨年の活餌を与えて飼育した成長と同程度であった。一方、ミジンコのみで飼育した区は、生残率は80%以上で推移したが、6ヵ月後の成長は2.5~2.7g/尾と低く、活餌でも成長にあわせて餌を切り替えることが必要と思われた。12月初めに収容尾数を10尾にして飼育したところ、地下水の注水でウナギ用練餌を与えた区の成長が最も良好で、1月末には11.0g前後になった。このようにウツセミカジカの0+魚はウナギ用練餌でも良好な成績が得られ、より簡易な飼育が可能となった。

②、ウツセミカジカは秋から冬にかけて琵琶湖の彦根~安曇川ラインより北側の水深60~70mの所に多く分布するようになり、沖曳網で一曳網あたり20~60尾採捕された。しかし80~90m付近には少なく、池中では好んで摂餌するスジエビの分布と若干異なっていた。但し、スジエビは水深が浅くなると小型の個体が多くなる傾向にあった。12月~1月頃の沖曳網は水深60m以深の所で多く操業されており、前述から一隻がウツセミカジカを一日100尾以上漁獲しているものと推測される。その漁獲されたサイズは全長で39~148mm、体重で0.6~54.0g/尾と幅広く、5つの年級群に分けられた。しかし、多くは全長75mm、体重4.0g/尾前後の1+魚と思われる小型の個体であった。この体型は池中飼育の結果より小さく、湖中の餌環境はウツセミカジカにとってあまり良好ではないと推察される。なお、餌になると思われていたヨシノボリ、ヌマチチブは、ウツセミカジカと全く異なった分布を示した。

【成果の活用面・留意点】カマキリは福井県で年間100尾程度しか採捕されず、他府県ではカジカの種苗生産と養殖が行なわれ、高価に取引されている。そこで、本県のウツセミカジカは蓄養殖に成功すれば、地場の特産品として有効に利用されものと思われる。



ウツセミカジカの養成 (0+魚)

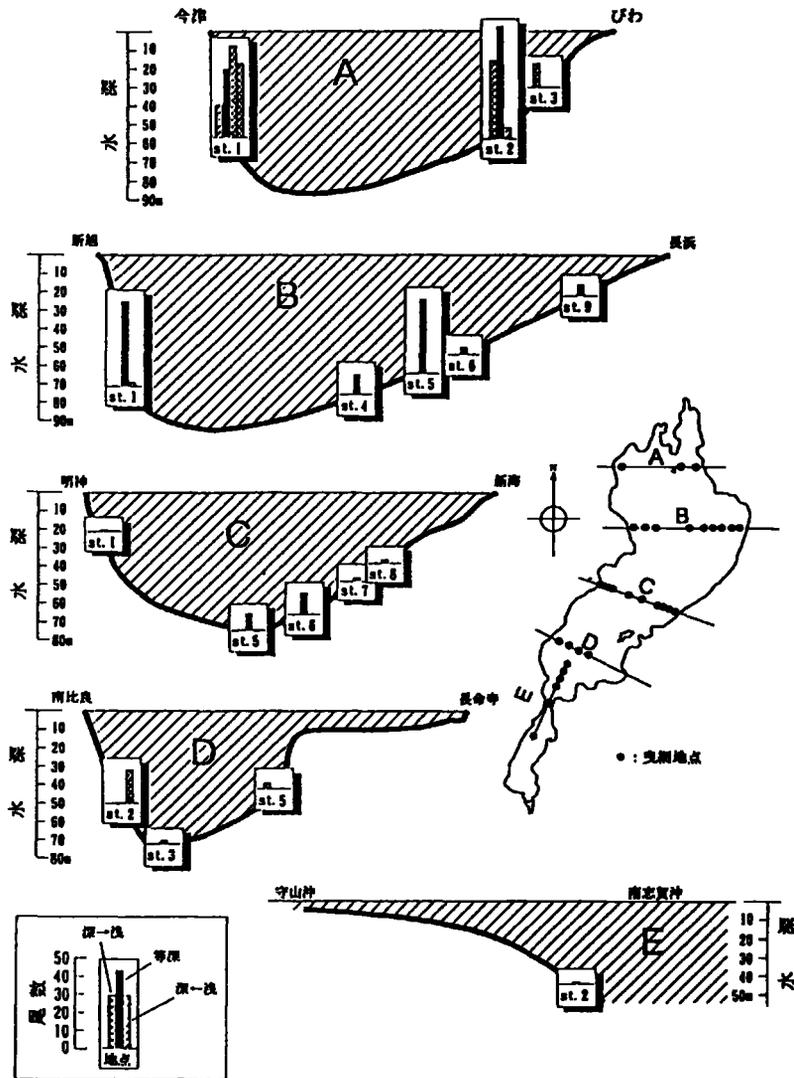


図 ウツセミカジカの水域別水深別の1曳網あたりの採捕尾数(1993年1月11~23日)